（別紙３）

公表　事業所における自己評価総括表

○事業所名	障害児通所支援事業ふらわーず			
○保護者評価実施期間	令和　７年　１１月　１７日	～	令和　８年　１月　３１日	
○保護者評価有効回答数	（対象者数）	22	（回答者数）	11
○従業者評価実施期間	令和　７年　１１月　１７日	～	令和　８年　１月　３１日	
○従業者評価有効回答数	（対象者数）	3	（回答者数）	3
○事業者向け自己評価表作成日	令和　８年　３月　１４日			

○ 分析結果

	事業所の強み（※）だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	活動プログラムが豊富（長期休暇中の活動は、発達段階に合わせて、クラスを４つに分けて対応）⇒体験的なプログラムを中心に、子供たち同士の関わりを多く取り入れている。また、小学校入学を見据えて、１対１の個別活動も入れている。	限られた部屋数しかないこともあり、子供たちがやりたいことをのびのびやれるように、長期休暇になると、児童発達・放デイ（放デイの中でも年齢に関係なく、発達段階に応じて、クラス編成を行う）４つのクラスが、重なる事の無いように、別々に活動をしていく。子ども達のクラスを見える化【しんかの図】していきながら、自分の場所確認が出来る様にしている。	同じ年代のお子さん同士の交流を積極的に行えるように、児童館や公園遊びを多く取り入れていく。（まだまだ活動場所の開拓をしながら広げていきたい）　体験できる活動の為に、地域の方や企業ともタイアップしながら充実を図っていきたい。
2	利用児童生徒の移行支援をバックアップ⇒保育園から認定こども園へ・認定こども園から小学校へ	年に２回のモニタリングの中で保護者にお子さんの現状とは別に、２～３年後の姿をイメージして頂く言葉かけを行っている。今だけでなく、お子さんの今後の姿を保護者の方と共有して支援できるように心がけている。	発達に詳しい専門的な知識豊富な職員の確保と、職員間の共通理解、スキルアップしながら、保護者に対してどの職員でもアドバイス出来るようにしていく。（今年度から、職員のスキルアップの為に、３名の職員が大学のオンライン講座を受講中）
3	本人支援に関して、当事業所だけで対応するのでなく、関係機関を巻き込んでの連携を行っている	単独事業所であるため、１事業所が動いても変わらない。１人で戦わずに、相談・学校・医療機関など関係機関に、その都度、状況提供しながら、一緒に動くようにしている。	事業所からの発信を密にしながら、連携体制を強化していく

	事業所の弱み（※）だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	職員の定着率（利用児童生徒と同じく、職員に対しても次の目標が出来た時は、「卒業」を促す為、管理者以外で５年以上の経験者がいない）。	ここ２年ほど、職員の入れ替わりが多く、業務の引継ぎがしっかり出来ず、新しく入った職員が不安を感じていた。また、管理者以外、１～２年の勤務経験者しかいなかったこともあり、職員教育が行き渡ることが出来なかった。　開所当初からの企業理念がうまく伝わらず、職員間の連携が難しかった。	体験的活動に関しては、以前と変わらず行っていきながら、職員主体というより、子供たちが主体的に動いていけるような活動設定に変えていく。また、地域の児童館などでの地域の子ども達との関わり・交流を増やしながら子ども同士の関わりも増やしていき、職員が見守りしながら、何かある時に改善策を提案していく状況にしていく。（児童発達支援というより放課後等デイサービスのお子さんに関して）⇒職員のモチベーションを下げないような職場環境を目指していく
2	事業所内外がバリアフリー対応でない事	賃貸住宅の為、バリアフリー対応のリフォームは、難しい。	大々的にバリアフリー対応事業所でないことを掲げ、利用検討している状況でしっかり事業所内を内覧していただき、保護者、お子さんに選択していただく。
3	単独事業所の為、事業所同士の関わりなどが出来ない	単独事業所の為、職員もだが、利用している子ども達も大人数での催しなどが出来ない	職員の研修も所外での研修を中心にやっていきながら、繋がりを持ってもらう。また、利用している子ども達の活動も所外での地域活動などに参加しながら、事業所内で完結しない、外に外に視点を持って行けるようにしていく